

移轉す。故に今吞龍を中興の開祖とす。夫より五世瑞空代、享保十四年八月本多房州より寺地替の儀被申渡依之同年九月及出願、翌十五年二月十七日許命を蒙り、中夏の頃今の地に移轉せり。舊寺地は百姓町にて漸く二百七十歩、今の地は千二百歩。房州の母公より本堂建立せらる。とあり。右舊寺地は百姓町慶覺寺の向小路にて、従前慶覺寺の川上なる河内屋といへる商家の邸地は、そのかみ法然寺の卵塔の跡なりとて、後々までも骨瓶などを掘出せり。といへり。又按ずるに、改作所舊記に、ねいと云ふ女放火したる爲め、寛文六年四月十六日法然寺下河原に於て、釜煎に被仰付といふ事見たり。右のヶ所は犀川下仁藏の邊也といへれば、寛文の頃法然寺は犀川川下なる河原邊に寺ありしを、其の後百姓町へ移轉し、享保十五年に再び川上今の地へ移轉せしにや。但し川下に寺ありし事は、寺記等に記載せず傳承のこともなしとぞ。

○法然寺藥師堂

緣起に云ふ。當寺中興開山吞龍上人、勢州阿漕浦を通行せしに、海中に光あり。吞龍近付き見るに、海水中に佛像流

れ寄れり。則引揚げ見れば、藥師如來の像なりけり。依りて水上藥師と號す。吞龍みづから背負ひて歸り、門内の土藏に假に安置するに、御座の下より靈泉涌出でたり。且此靈水を汲みて藥汁に用ひるならば、其功驗あるべしと夢想の告あり。依りて諸人告の如く藥汁に用ふるに、其功驗あり云々と。又舊傳に云ふ。此の藥師を信仰する人は必ず火難を免るゝとて、信仰の人多く、靈驗を蒙れる者多しといへり。且従前は門内なる土藏の内に安置し、御座の下に靈泉ありしかど、右土藏を破壊せしに依りて、今は假に本堂脇に安置せり。按ずるに、吞龍は延寶二年三月任職と成り、同七年十一月廿六日寂すとあれば、藥師の靈像を迎へたるも其の時代の頃なるべし。

○小金之墳墓

法然寺境内の卵塔場にあり。舊傳に云ふ。昔此の地邊法嶋河原とて、犀川の河原なりし頃、此の所に於て男女情死す。こきんは其の頃の娼妓なりしが、男女共に白装束にて水盃をなし、いさましき体にて情死すと。則ち其のヶ所に男女合葬せし墳墓是なりと云ひ傳へたり。其の年月等は傳承せ

されど、法然寺のいまだ此の地へ來らざる以前の事なれば、享保以前にて古き事なるべし。寺傳に云ふ。享保十五年此の地邊を寺地と成したりし頃、此の墳墓此の地にありしを其の儘になし、寺の卵塔場になしたりといひ傳へたり。今存在する石碑は、南無地藏大菩薩と彫刻するのみにて、年號等を記載せず。今世人小金の塚と呼び、その墳墓に建てたる塔婆の木を削り取りて煎じ吞めば、癆性病の者必ず平癒すとて、所望する者多し。故に絶えず寺より塔婆を建立すと。平次按ずるに、文久二年に上梓せる宮川舍邊筆に、江戸南本所猿江慈眼寺にある比翼塚は、明和六年に情死せし男女の墳墓にて、明がらす比翼塚と呼べり。如何なる譯にや、近頃癆疫の病に此の塚の塔婆を削り用ひて驗ありとて、世人競うて用ふと書載せたり。此の外にも尙かゝる事ありけん。又男女情死の墳墓は、萬葉集に見ゆる葦屋菟名日處女の墓をば濫觴とすべきか。此の故事は、大和物語に、むかし津の國にすむ女ありけり。それをよばふ男二人なん有りける。ひとりはその國にすむ男、姓はむつらになんありける。今ひとりはその國にすむ男、姓はなんありけ

る。姓はちぬとなんいひける。二人の男同じおもひによばひけるを、をんなおもひわづらひ、すみわびぬ我が身なげん津の國の

生田の川は名のみなりけり

とよみて、此いくた川に臨んで死にたり。のゝしるほどに、このよばふ男ふたり。やがておなじ所におちいぬ。ひとり足をとらへ、今ひとり手をとらへて死にけり。されば女の墓をなかにて、左右になん男の塚ども今もあなる。かの塚の名をばをとめづかとぞいひけるとあり。玉葉集に、生田の海に身なげゝる女の、けさう人の二人ながらおなじくしづみたる事を、人々歌によみけると見ゆ、太平記八卷に、攝津國摩耶城の南麓求塚とある古墳是なりと聞ゆ。此は情死人の考證に引くのみ。

○松本町

法然寺の前通なる堅町を呼べり。山伏實高寺の由緒書に云ふ。享保年中までは法然寺の近邊まで法嶋河原と稱し、享保十年の頃より右河原初めて新地子地と成り、追々町家相建ち、町並出來す。とあり。按ずるに、是此の町地の濫觴